OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

紹　　介

アンドレイ・アニーキンとふたつの著作について

山　崎　　怜

1

1975年9月30日と10月1日の2日間，ドイツ民主共和国の古都ハレでおこなわれたスミス『国富論』二百年記念コロキウム（正式には Kolloquium mit internationaler Beteiligung 200 Jahre Adam Smith' "Reichtum der Nationen"）に私は唯ひとりの日本人として出席したが，初日の午前の部がおわり，三三五五に参集者たちが会場の新市内にあるマルティン・ルター大学薬学部の広場に出て昼食に向かうとき，やや東洋系の血もまざったかにみえる中年の人物が近づいてきて，「あなたは日本人か」ときく。そういえばこの男性はかなりまえから私に注意を払っていて，それとなく，こちらに視線を投げかけていたことを私は知っていた。

「そうだ」とこたえると，「マツカワ教授をご存知か？」と尋ねながら，自分はこういうものだといって名刺をさしだした。みると，アニーキンとあり，とっさに私はこの人は1973年6月のカーコーディでおこなわれたスミス生誕二百五十年記念に報告者として予定されながら，何かの理由で突然に欠席した人物という記憶がよぎったので，その事実をたしかめた。しかし，かれはそういう報告予定ははじめからなかったといい，けげんな顔つきをした。くりかえして念を押しても答えは同一であり，あとは無言なのである。腑におちなかった私は帰国後あらためて報告集の関係部分での議長サー・ロイ・ハロッドの発言(1)をよんで多くを語らなかったアニーキンの言外に示したものを察知したのである。

かれはしきりにマツカワ・シチロウ教授の日本での評価と，マツカワ教授と私との関係

(1) *Symposium to commemorate the 250th Anniversary of the Birth of Adam Smith held in the Adam Smith Centre, Kirkcaldy on 5th and 6th June, 1973*, published by Kirkcaldy Town Council, 1974, p. 49. ここで，ハロッドは実名を挙げずに，ひとりのロシヤ人としている。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

をきくのでその学問的令名とすぐれたペティ研究を紹介し，友誼と信義にみちたマツカワ教授の研究者としての卓越した資質をのべた。アニーキンはさも安心したかのように微笑し，じつはマツカワ教授が自分の『アダム・スミスの生涯』の日本語訳を準備して近く出版の運びであるという。

これがきっかけとなり，2日間の会議の合間にはアニーキンと話しあうことが多かったが，博覧強記，諧謔を解し，相手の気持を鋭く汲みとる点など，能力の大きさを覗かせたし，語学力も尋常でないようにみうけられた。かれの人間味は，ドイツ人の聴衆をまえに，自身ドイツ語を自由にあやつるのに，スミスと2名のイギリスからの参加者に敬意を表してイギリス語で報告したことにも示される。そうしたアニーキンも文献考証や批判的検証をめぐって同教授の急追する細部の質問にはまいっているらしく困り果てた顔つきである。しかし，よくきいてみると，マツカワ教授に逢ったことも直接に話をする機会もなく手紙の上だけでのことであるという。経済学を専攻する日本人で初対面の光栄に浴したのはどうも私のようであって，ほかに知っているという日本人のツル教授（じつはツル教授）もその著作をよんだことがあるというだけであった。

話題の中心はアニーキンが日本のスミス研究の現状や日本経済の現状を私に質し，私の方は帝政ロシヤやソヴェト連邦におけるスミス研究史とその今日的情況をきくことにあり，長い間，溜飲を下げることのなかったニコライ・ツルゲーネフ『租税試論』へのスミスの影響やプーシキン『エウゲニ・オネーギン』中のスミスの愛読者としてのオネーギンについての私の疑問に，えたりやおうと説明したのはさすがであるし，スミスはもちろん，18世紀スコットランドやイングランド，ひろく同世紀の西ヨーロッパについての知識のふかさも通りいっぺんのものではなかったのである。

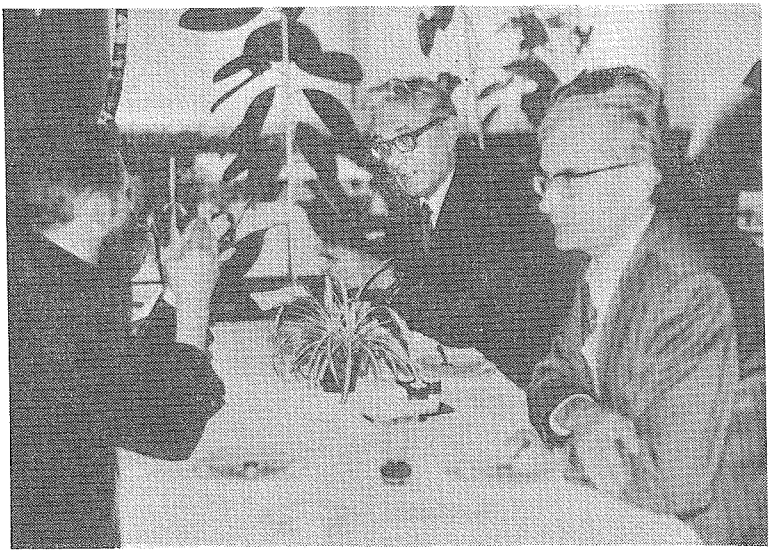
ハレ会議のなかでコロキウムの組織者タール教授をはじめ国籍をことにする多数の研究者と意見交換ができたのだが，アニーキンとの出合いはとくに有意義ないろどりを添えてくれた。お蔭で閑暇をかこつこともなく，過ぎゆく時間が惜しまれるばかりだったし，私がベルリンに出かける日の朝，ホテルのまえでかれと別れのことばをかわしたときも双方ともいくらか感傷的にさえなっていたとおもう。ただ残念だったことは当時は以下にしるす書物（ひとつは私の滞欧中，もうひとつは帰国後に出版）をよんでいるというわけにはいかず，私の質問が一般的にすぎて切りこみが足りなかったことである。

いずれにしても，その該博な生き辞引き風の知見と苦労人風の応接とは私にきわだった印象をあたえたし，つよく日本との学問的交流をのぞみつつも，彼我の体制のちがいが自

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

由な往来をはばんでいることを言外に嘆いているようにみうけられた。おそらく，のちに言及するモスクワ版日本語訳の出版が可能となったのはそうしたアニーキンの意図もつよく作用したにちがいない。その本のコピーは1977年4月にかれの私信とともに私の手許に届けられたが，日本人の反応をじかに知りたいと希望する著者の内意は手紙の文面にも示されていた。

ハレでのアニーキンとの話しあいのなかで『スミスの生涯』の斬新さを知るにつけ，帰国後にその邦訳を手にするたのしみをつたえ，また，できればそれを紹介したいと念じ，さらにまだ逢われたことのないかれの肖像やこのコロキウムのシーンのいくつかをマツカワ教授や日本の同学の方にみやげとすべくカメラに収めたにもかかわらず，ロンドンの写真屋の店先から，心なき店員の不手際により，かんじんのフィルム1本分37コマが行方不明となった。すでに成功裡に現像ずみであったが，焼付の不良を理由にプリントの再注文をしたのが災いのもととなり，逆光を背にしたアニーキンの戸外での立像，記念講演中のタール教授，報告中のグラースゴウのスキナーやノッティンガムのコーツといった外人組，小柄なクチンスキー夫人の報告の姿，とくにおねがいして何枚かのショットをさつえいした夫君ユルゲン・クチンスキーのシングル・ポートレイト，会場の薬学部の建物と庭先，受付風景，モーリツ城での晩餐会での光景や夜会服を着たタール夫人のにこやかなホ



（マルティン・ルター大学薬学部食堂にて）

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ステスぶり，あるいはタールの私宅での忘れられぬシーン，ブラッセルのナジェルズ教授とタール一家の姿など，ハレでのハイライトともいうべきものがすべてうしなわれた。

そのためにアニーキンその人のポートレイトをここにかかげることはできないが，偶然にもそのフィルムからプリントした唯一のものがのこされたので，あえて掲出した。これは昼食後のデザートでの交歓風景で，場所はマルティン・ルター大学薬学部の食堂，左側の手前はスキナー，その向う側はタール（ほとんどスキナーの陰にあってみえない），右側のいちばん手前はソ連邦のミレイコフスキー（アニーキンの『スミスの生涯』の冒頭に序文をかいている），その向う側はコーツ（頭髪上部の部分のみがみえる），いちばん奥にあって，こちら向きにスキナーの対話者となっているのはユーゴスラヴィアの代表。このときアニーキンは手前右側の隣席にいて他の代表と歓談していた。私自身もそのアニーキンたちのテーブルに同席していたが，さつえいのためにそこを一時中座してスキナーの脇に立っていたわけである。

2

アニーキン『アダム・スミスの生涯』(松川七郎監修・小檜山愛子訳，勁草書房刊，昭和50年12月刊，411＋人名索引8ページ)

アダム・スミスの伝記には，代表的なレイやスコットのものがあり，日本では水田洋教授の『アダム・スミス研究』(未来社）の前半部分が今日の標準である。レイの伝記は『アダム・スミス伝』（大内兵衛・大内節子訳，岩波書店，昭和47年10月刊）として邦訳があり，スコットは邦訳がない。パイクの『アダム・スミス——経済学の創始者——』(中村恒矩・竹村孝雄訳，法政大学出版局刊，昭和46年1月）もおもしろいし，現在は入手しがたいが，ハースト『アダム・スミス』(遊部久蔵訳，弘文堂刊，昭和27年11月刊）も有益である。新スミス全集にタイアップしてロスの執筆になる伝記が予定されているが，未公刊である。

こんななかでアニーキンの『生涯』はどのような特徴をもっているだろうか。

ゴーリキーの創始した『偉人伝叢書』の1冊にふさわしく，まず叙述がこなれ，専門外のものにも近づき易いといえよう。原著者自身が「日本語版への著者の序文」でのべているように，スミスの生涯にはきわだった事件も特異な事実もすくなく，本人が日記も回顧録ものこしていないために，好読物としての伝記がない。スミスの人間的な風貌や生活のたたずまいをできるだけ生生しく再現するとともに「科学的に内容の豊富な書物」をかき

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

あげる，というねらいは，すくなくとも啓蒙的な仕事としては，ソ連の学界を考慮にいれるかぎり，十分に成功している。資料収集を開始して十年，日常の仕事や他の仕事の合間にこれだけの作業をすすめるアニーキンの集中力や文章力には脱帽してもよい。

叙述は小説風であって，プロローグの第１章はスミスの死から筆をおこす。「平地地方のスコットランドでは２月はもっともいやな月である。暖かでじめじめした天気がつづく。……／ぬれて重たくなったレインコートに身をつつんだ２人の男が，短い横町をとおりぬけ，大きな邸宅パンミュア館の玄関へはいっていった。スコットランド関税委員の１人で，著名な哲学者のスミス博士は，この屋敷の１部を借りているのである。この２人は公証人と書記である。……／かれらはレインコートから水をはらい落し，入口でそれを脱いだ。老僕が２人を階上の主人の書斉へ案内した。」「老人も長くはなさそうだ。ちょうどよいときにかれは遺書をつくったものだ」と公証人は依頼人のほうをみながら思った，というのがかきだしで，おおくのシーン，出合いが万事この調子でかかれている。

それだけではない。われわれがその交友やおなじクラブの１員であったことを伝記的事実としてのみ知っている著名人物たちが本書ではあたかも芝居の脚本のようにダイアローグをこころみる。

たとえば，スミスとヒュームは1748年秋，つぎのような会話を後者の書斉でおこなう。

ヒューム「ところでスミス君，あなたはイギリス文学の連続講義ができないわけはないでしょう。……あなたの敬愛するセネカが，『人人は教えるあいだに教えられる』と言ったではありませんか。」

スミス「けれども，あなたが敬愛しておられるホラティウスが，自分の労作をいそいで披露しようと思いあがっている芸術家について，『君たちは嘲笑せずにいられるか？』と言ったことを思いだしてごらんなさい。」

ヒュームは大笑いした。

ヒューム「自分の博識をひけらかしあうようなことはもうやめましょう。それにわたしは，あなたがオクスフォードで習得された知識によって，わたしを急速においこされるにちがいないと確信しています。そこで，わたしは希望者のための連続講義のことをくりかえしたい。前金で，たとえば，１人あたり１ギニーです。わたしはある，２，３の人たちとこの考えを検討してみましたが，かれらはこれに賛成しているのです。」……

スミスは視線をあげると，突然言った。

「わたしは賛成です。やってみましょう。」(88—89ページ)

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

これがエディンバラ公開講義にスミスが参加するきっかけなのである。

各種のダイアローグのなかでも渡仏したスミスがアンシクロペディストたちと会話をかわすシーンはハイライトで，エルヴェシウス夫人やテュルゴやケネーとスミスの対話やそうした場面の描写はブラック・ユーモア的なぶきみさとたのしさがある。

モルレ神父がやや皮肉まじりにヴェルサイユの賢人訪問談をひとくさり話しおわると，エルヴェシウス夫人がスミスにたずねた。「ケネー氏はお気に召しましたこと？」「あなたのお友だちのヒューム氏は，かれにあまり好意をもっていらっしゃらなかったようでしたけれど。」(224ページ)

「ケネー博士が，わたしのこれまでにお会いした最高級の人物の1人であることは，まちがいありません」と，スミスはつとめてことばを選びながら，ついに口をきった。「かれに会うと，だれでもかれをひじょうに尊敬したくなるのです。夫人，それでわたしは弟子たちのかれに対する心服がよくわかります。……」(225ページ)

テュルゴ「わたしが最近あなたと語りあったいろいろな思想について，わたしはそれらのあるものを文書にすることにしました。わたしには，あなたが計画しておられたような大著述をするつもりは，毛頭ありません。と申しますのは，わたしにはそのための熱意も，時間もないからです。……ご存じのように，リモジュではものをかく時間はありませんが，考える時間はあります。……哲学はこの世の問題に注意をはらうべきで，その問題とはわれわれの日日の糧（かて）のことだ，というあなたのご意見はまったくそのとおりです。……」

テュルゴは話をやめた。スミスは，自分の関心をおしかくして口をつぐんでいた。(231—232ページ)

この書の第2の特徴はこうした人間スミスの登場にみられるように郷国スコットランドのこと，スコットランド啓蒙の思想家たちが積極的に押しだされていること，第3は18—19世紀ロシヤ思想とスミスとのかんけいがあざやかに摘出されていることである。

ここで紹介はさしひかえるけれども，プロローグ第2章「ペテルブルク（1819年)」，第2部第7章「グラースゴウのロシヤ人たち」は手に汗にぎる歴史のクリティカルなエピソードをつたえている。

著者はもちろんこの本を小説としてかいたのではない。またスミスのたんなる伝記のみをかこうとしたのでもない。小説的手法と潤色をはさみながら，伝記をとおしてスミスの思想と理論を一般の読者に提供すべく腐心したのである。だから，著者アニーキンは上記

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

のような会話のなかに経済理論をくわえるし，歴史の挿話と挿話のあいだにも理論の展開をこころみている。そこで理論の説明もまた通例の方法とはことなり，一定の工夫がこらされているとおもわれる。

第3部第3章「労働価値」は「政治経済学は寓話を好む。これは当然である。というのは，すぐれた寓話は，人間の経験を普遍化したようなもので，その寓意は，経済学的な観点からも……興味ぶかいものたりうるからである。ものを売ったり買ったり，支払ったり，というようなことをした「ある人物」は算術の問題集の主人公であるばかりではなく，経済学上の論説の主人公でもある」として，スミスにならって，「ぬけめのない3人の若者の寓話」を素材に，商品と商品の交換，資本と労働の交換をめぐるスミスの難点を説いている。

たしかに，この書は専門の，そして狭義のスミス研究書として従来の水準をどの程度，どのようにこええたか，スミス研究の実質をいかに前進させえたか，と問うならば，スコットランド史およびロシヤ史的視点のみなおしを別とすると，あたらしいものはすくないといえるかも知れない。

しかし，この書の全編にはりめぐらされた伝記的諸事実の配置，思想と理論の血のかよう再現ないしは再構成の人間臭のあふれた処置，プロローグ，準備，実行，終末という編別構成，さらには各章のわりつけの妙味，膨大な諸事実の丹念な渉猟，これらは固有のスミス研究の伝統をもたないソ連の経済学界をおもうとき，むしろ，ひとつのおどろきである。私は，経済学を専門としない，ある未知の人からスミスの伝記について質問をうけ，条件つきで本書を紹介したが，その結果，スミスにアプローチするための好適書であることを確認しえたようにおもう。

もしも，この書の欠陥をあげるとすれば，訳者も指摘されるように，処女作で出世作の『社会感情の理論』（一般に『道徳感情の理論』といわれている）をまともにとりあげていないことにあろう。著者はスミスが2部の大著をものしたといいつつも，「現代では，かれは一書の人にとどまっている」(364ページ）として，この「現代」を肯定しているのだが，これは「アダム・スミス問題」以前的であり，ドイツ歴史学派のうらがえしの再版であって，本来，人間と社会をつなぐ環を解明しえた最大の社会科学史上の古典である『社会感情の理論』が政治経済学とその創設者を人間化して説きあかすはずの本書の対象領域から脱落していることに今日の歴史の不幸を垣間みるおもいがする。(2)

（2）　同時に著者が「アダム・スミスの真の仕事はすでに完了していた」(390ページ）と

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

原著は Аникин, А. В., Адам Смит, Москва, 1968.

3

アニーキン『マルクス経済学序説——ペティからオーウェンまで』(石島ユタカ訳，プログレス出版社，1976年刊，7＋567ページ)

アニーキンと別れを惜しみ，ベルリンやポツダムを訪問して，ふたたびハレに舞い戻った私は市内の本屋で数冊の本を手にいれた。そのなかに，ロシヤ語からの翻訳とみられる経済思想史の書物 *Ökonomen aus drei Jahrhunderten: Das Leben und Wirken der Ökonomen vor Marx und Engels*, Berlin, 1974 があり，ふんだんに写真をいれ，とりあげられた人物も個性的であることに新鮮味をかんじたのである。デフォー，ジョン・ロウ，ケネー，サン・シモンなどの肖像がならび，みかえしにはモンクレチアン，トマス・マン，タッカーの名がペティやスミスやリカードゥの名とともにデザインとして刻印されていて，こんな本をヨーロッパ大陸の奥ぶかいドイツの中世都市で，しかも社会主義国ドイツの地方都市の本屋の店先で手にとって眺めるというのは私にはまたとない体験であったが，それがほかならぬアニーキンの原著であることに気づいたのはホテルにかえってからである。

しかし，この書を現地でひもとく時間はなく，タール教授に日本への回送を依頼して，翌々年の春，帰国後にまた手にとってみた。そうして相前後して上記の邦訳がアニーキンからおくられてきたわけである。

標題が翻訳ごとになぜにこんなにかわるのか，私には不思議である。原著は『科学の青春——マルクス以前の経済思想家たちの生涯と思想』(Юность Науки: Жизнь и идеи мыслителей-экономистов до Маркса) というものだが，ドイツ語版は上記のようだし，邦訳に至っては原題とはほとんど別物という感じがする。『マルクス経済学序説』といったタイトルは一般には『資本論』を中心とするマルクス経済学の序説的解明を指し，本書のような遠くはアリストテーレスから，ないしは本格的にはペティからオーエンまでを

いうのも，スミス生涯の帰結の説明として不適切であって，なるほど『諸国民の富』がかれの仕事の最重要部分のひとつだとしても，未完の「法と統治の理論」をふくめ，焼却された未知の文書の広大さ，開放体系としてのスミスのひろがりをおもうべきである。そしてアニーキンが，死の年にも大幅に改訂した『社会感情の理論』第6版(最終版)を公刊するスミスに言及することがないのも，このことにふかく関連しているとおもわれる。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

歴史的にのべきたる内容をあらわす表現ではない。私には『科学の青春』という原題がこの書にもっともふさわしいし，著者の手法にも合致しているとおもわれる。ドイツ訳の『三百年の経済学者たち』も邦訳のものよりはましではあるが，なぜに『科学の青春』をやめにしたのか，納得しがたい。

私が原題を内容に適切だというのは，第1に編別が人名別であり，かれらについて形式の上での重商主義とか古典派とかという学派別のとりあつかいをあえて避けつつ，経済思想家の人間的側面を揚言し，スミスのばあいでも，その説きおこしの章は「スコットランドの賢者」ではじまるといった具合だからであり，第2に叙述内容も，それぞれの人物について従来の，こうした本では異例ともいえるような，おびただしい，エピソード，人間像を提出して読者に親しみをもたせることに気を配り，また第3にとりあげる人物もかならずしも大人物に限定せずに，脚光を浴びるとはかぎらない人物の活躍があってこそ，この学問の興隆がありえたと主張するかのように星雲の時代がすなわち青雲の時代にほかならぬとしているにちがいないからである。「政治経済学」の語をはじめてあみだしたとされるフランスのモンクレチアンや同じくフランスの不遇な経済学の先達ボワギュベールなどについての著者の伝記的紹介は『科学の青春』にいかにもふさわしい生き生きとした感銘をあたえる。不運なリストもまた1章をさかれていることは留意に値するとおもう。

そうして容易に想像されるように，この本は『アダム・スミスの生涯』での達意の文章と経済学者の人間的再生の意図をひとりの人物から複数の，しかも，その歴史的ながれの把握に拡大したものということができる。

注目すべきことはつぎの3点にあるであろう。

第1は著者が経済学のカテゴリをその論理的系譜で説くのではなく，総体としての経済学と経済思想のなかで歴史と社会とを後景として説いたことである。それは論理の透明さをあえて犠牲にしても生身の経済思想をうちだそうとするかのようである。

第2はクールノーへの積極的評価をとおして経済学における数学的方法の意義を論じ，「マルクス主義経済学が非マルクス主義経済学と異なるのは，数学が適用されているか否かには関係〔が〕ない。数学の適用に関する問題は，科学的合目〔的〕性によって解決される。ある分野における重要な結果は，形式的数学的方法を使わずに達成されうるし，また別の分野ではそれは有益で不可欠でさえある」（479ページ）といい，マルクスもまた科学はそれが数学を利用することに成功するときにはじめて完成する，とのべたとし，「学問のあらゆる分野の数学化と，サイバネティックス的，システム・インフォーメーション的取

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

扱方法の発展は，大きな影響を経済学に不可避的に与えている」(480ページ) と指摘していることである。

第3は著者の該博な知識と資料の見事な配置であって，各所にはっと胸をつかれるような文節がある。

しかし，こうした著者の文章力が邦訳文上の難点，日本語として訂正すべきもの，「悲感的」(130ページ)，表記上のミス，「カーゴーディ」，「エドウィン・カンナン」(281ページ)，「他人の懐に押し入る」能力 (同ページ)，「ハトコム・パーク」(336ページ)，ミス・プリ，「暴従」(42ページ) といったものにより，いささか台なし気味であるのは惜しまれる。折角，アニーキンが「ラクダの忍耐と聖者の辛抱」なしには経済学のいくつかの重要な著作をものにすることは不可能だとするハイルブローナーにたいして，「読者にこのようなことを要求するつもりは毛頭ない」(24ページ) と宣言しているくらいであるから，すくなくとも表現上のミスは早目に訂正してほしい。いまの「辛抱」も書物の上では「辛棒」と誤記されている。

ともかくも，この書は史上はじめてモスクワで出版された邦語の経済学史，経済思想史であり，ケインズ，サミュエルスン，ティンバーゲン，シュムペーターなどにも言及しつつ，『マルクス経済学序説』ならぬ先マルクス経済思想史を展開したものであって，一種不可思議な味わいをもっている。

附記 ここにとりあげた2著作については，すでに，それぞれに書評があり，有益である。前者への水田洋教授のもの (『エコノミスト』昭和52年3月2日)，後者への杉原四郎教授のもの (関西大学『経済論集』第27巻第2号，昭和52年6月)。

私のこの1文はもっぱらハレでのアニーキンとの個人的約束を果たす意味でかかれた。

著者は1927年シベリアのトムスクでうまれ，1957年から科学アカデミー世界経済・国際関係研究所の所員でアメリカ合衆国経済部門の主任，同時にモスクワ大学の経済学教授。専攻は日本流にいえば現代資本主義。通貨問題，為替問題など貨幣・金融的側面に意力をそそいでいる。

さいきん邦訳された『黄色い悪魔——金と資本主義——』(副島閲／横倉訳，大月書店刊，昭和55年5月) の「日本語版への序文」はつぎの文章からはじまる——「本書は，日本語で公刊される私の3番目の本です。このようにして確立された日本の読者との接触は，いうまでもなく，著者としての私に大きな満足を与えてくれます。著者が自分の著書

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

への賛辞を聞くとき著者が受ける感情は，母親が自分の子供たちへの賛辞を聞くときの母親の感情とだけ比較することができます。理性のある著者は，これまた理性のある母親と同じように，自分の労作に向けられた非難や批判にも，注意深く耳を傾けます。私はそういう著者であろうと努めています。／私の以前の2つの労作は経済思想の歴史に充てられたものですが，本書と同様に，広範な読者向けのものであり，そして多くの面を現代に向けていました。そのうちの1つは，二百年以上もまえに経済科学の基礎を築いたイギリスの偉大な学者，アダム・スミスの経歴を平易に紹介したものです。もう1つは，17—19世紀の，マルクスの労作が出現する直前までの，この科学の発展の概要を内容としたものです。／いまここに日本の読者に読んでいただこうとする著書は，やはり一部分は歴史に関係しています。(後略)」

献辞　この小さな文章を松川七郎教授の追憶に捧げる。